

<実践研究>

鳥取大学附属特別支援学校の高等部専攻科における取り組み ～「学校から社会へ」「子どもから大人へ」の移行支援教育として～

山本恭子*・本城睦子*・谷口直紀*・西垣美恵子*

Educational Practice in the Postgraduate Course of the Upper Secondary Department of Tottori University school for Children with Special Needs ～ As an Transition Support Education from School to Society & from Childhood to Adulthood ～

YAMAMOTO Kyouko, HONJYO Mutsuko, TANIGUCHI Naoki, NISHIGAKI Mieko

(*鳥取大学附属特別支援学校)

キーワード：高等部専攻科，青年期，学校から社会へ，子どもから大人へ，移行支援

Keywords: postgraduate course of upper secondary department, adolescence, from school to society,
from childhood to adulthood, transition support

1. はじめに

2006年度より鳥取大学附属特別支援学校（2007年度校名変更，それまで鳥取大学附属養護学校）に国公立特別支援学校においては初めて高等部専攻科が開設され，全国から注目される中，今年で3年目を迎えた。そこで本稿では，開設の思いや経緯，これまでの実践研究をまとめ，「学校から社会へ」「子どもから大人へ」の移行支援の視点から成果と課題を考察し，今後を展望する。

2. 専攻科設置に向けて

(1)なぜ専攻科なのか

特別支援学校の高等部を卒業すると，多くの生徒が更生施設や授産施設，企業へと進路先を決めている。企業就労しても，人間関係づくりの難しさから離職する人もいる。障害があるからこそ，もう少しゆっくり学びの場を保障する場が必要なのではないのか。青年期・成人期の「自分づくり」や自立支援・地域社会生活への移行支援がニーズになっているのではないのか（図1）。

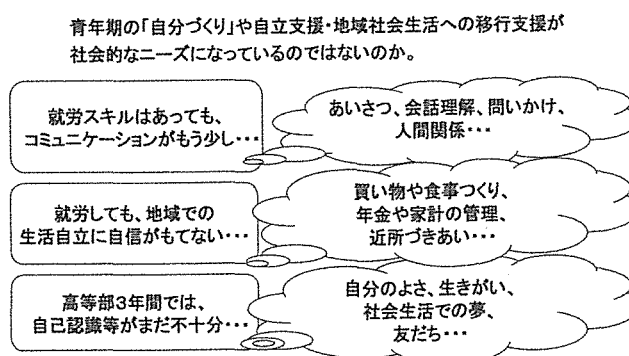


図1 なぜ専攻科なのか

私立ではすでに全国で7校が普通科の専攻科実践を試みており、本校でも18歳時点での就労、職業訓練、福祉サービス利用（福祉就労）以外の進路の選択肢が広がればという思いであった。

(2) 設置の基本理念

そこで校内専攻科設置委員会を立ち上げ、私立の先進校を保護者とともに視察し、本校独自の専攻科を模索した。そして青年期はアイデンティティの形成期・社会自立への準備活動期であるという特徴をふまえ、青年期の移行支援教育として、①普通科の専攻科、②2年制（1学年定員3名、計6名の複式編成）、③社会参加・地域生活を促す「青年期の自分づくり」を基盤とした教育課程をめざした。

開設後、次期専攻科生募集に向けた専攻科説明会のため、リーフレット（概要説明）を作成した。そこでは、「専攻科は学生一人一人の“自分づくり”を支援して、自立した豊かな社会生活に移行する力を育てます」、そしてさらに「こんな気持ちで学びたいみなさんを待っています。もっとゆったりと豊かに・・・」として次のような学校側が求める生徒像を挙げた。

- “自分らしさ”を見つけ、もっと自分に自信をつけてから社会に出たい。
- もっといろいろなことにチャレンジしてみたい。
- 社会生活の仕方をじっくりと学び、くらしを豊かにする力をつけたい。
- いろいろな職場体験をしてから、自分がやりたい仕事をみつきたい。
- 人との関わりをもっと広げ、コミュニケーションの力を高めたい。
- 自分の楽しみを広げ、余暇の時間が上手につかえるようになりたい。
- 調べたい研究をして、自分の思いが相手に上手に伝わる発表がしてみたい。
- グループホーム体験で、地域の仲間と暮らす学習がしたい。
- 一人暮らしもできるようになりたい・・・等

3. 高等部専攻科の概要

(1) 目標 本校の学校教育目標は、

「楽しい学校生活の中で、『自分づくり』を基盤として、一人一人の力を精一杯伸ばし、働くことに喜びを持ち、社会の一員として豊かに生きる人間を育成する」
～豊かな心を持ち、生活を楽しむ子～

である。これを受けて、専攻科のめざす生徒像は、

「社会への関心を持ち、様々な人と関わりながら、積極的に社会へ参加しようとする青年」
～まずやってみよう 自分を見つめ 広い社会へとびだそう～

これまで積み上げてきた学習や心の育ちを大切にしながら、“社会へ”“大人へ”の移行を意識した目標である。

(2) 教育課程

教育目標を達成するため、これまで積み上げてきた学習を統合し、継続して発展させながら力をつけていくもの、新しく取り入れていくものを整理し、「くらし」「労働」「余暇」「教養」「研究ゼミ」の5領域で編成することにした(図2)。

教養(知の出会い)と研究ゼミ(知の探求)での知識、くらし(生活・健康)、労働(生産・進路)、余暇(リフレッシュ・文化)での体験的な学習活動を展開する中で、“青春や生きがい、主体的な社会参加”を準備していく。

特に教養や研究ゼミでは、交流やゲストティーチャーなど外部からの働きかけや社会資源を活用し、くらし・労働・余暇の経験をもとにした領域での力の伸長に生かす。5領域の学習における様々な出会いの体験から発見へ。すなわち、自分探しを通して本物の体験を実現し、生きがいを感じて自己を発揮する。そして自分を見つめ、自己をコントロールして“積極的に社会に参加する青年”に育つことを期待する。

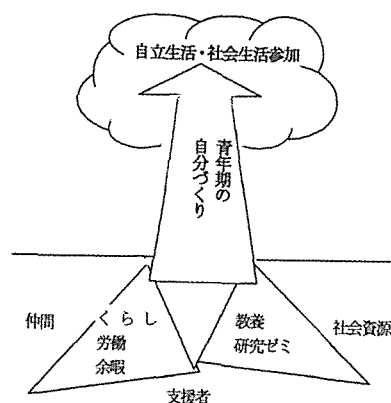


図2 教育課程構想図

(3) 週時程表

週時程は、生徒の実態に合わせてながら少しずつ改訂し、今年度は表1の通りである。

	月	火	水	木	金
8:40 ~ 9:00	登校・着替え・ミーティング				
9:10 ~ 10:00	くらし(健)				
10:00 ~ 10:30	くらし(ふれあい)				
① 10:30 ~ 11:20	くらし	くらし(食)	研究ゼミ	労働	教養
② 11:20 ~ 12:10					
12:10 ~ 13:20	昼食・休憩				
③ 13:20 ~ 14:10	労働	余暇	余暇	くらし	くらし
④ 14:10 ~ 15:00			清掃・ミーティング	労働	
15:00 ~ 15:15	清掃・ミーティング		清掃・ミーティング		

表1 2008年度 高等部専攻科週時程表

1 単位時間は50分間で、一コマ2単位100分授業で、コマ数が少なくゆったりとした時間が保障されている。一日は、今日の予定を確認するミーティングから始まり、その後すぐ50分間の「くらし(健康)」でウォーキングへ出かける。行き先はその日の担当が決める。帰るとティータイム。お茶を飲みながら仲間と団欒、学級費でとっている新聞を見る。これは大人のたしなみである。そして、心に残った記事を帰りのミーティングで発表する。また毎週火曜日は給食がカットされており、朝のウォーキングを兼ねて買い物をし、午前中に「くらし(食)」で昼食をつくる。帰りには、協力して教室に掃除機をかけるなど清掃をして一日が終わる。また一部であるが、「くらし(食)」と「教養」は、教科担当制をとり、担任以外の教員も授業

に関わるようにしている。

(4) 教育内容

5 領域の教育内容として参考にしたのが市販の「自立を支援する社会生活力プログラム・マニュアル」(注 1) である。ここでは、「第 1 部 生活の基礎をつくる」、「第 2 部 自分の生活をつくる」、「第 3 部 自分らしく生きる」、「第 4 部 社会参加する」、「第 5 部 自分の権利を生かす」の 5 部門とそれぞれの中にモジュール(単元・項目)があり、健康管理・家庭管理・障害者関係の法律と施策など 25 のモジュールで構成されている。この 25 のモジュールをすべて学習できるように年間計画(表 2)を作成している。

また本校では独自に「段階別教育内容表」を策定しており、2008 年度の改訂版では、専攻科対象の段階も加えた。一人一人の個別の教育支援計画における各学習の目標設定には、「段階別教育内容表」を参考にしている。

(5) 高等部本科までとの違いは

本校は、「人は発達していくもの」「人との関わりの中で自己形成していく」という“自分づくり”を大切にし、その支援として自己肯定感や自己有能感の積み上げを大切にしている。これをベースにすることは専攻科も共通している。その上で、「より自分で、より自分たちで」解決に取り組んだり、青年としての生き方(移行の準備学習)を考えてアイデンティティを確立しようとしたりする点が高等部本科以上に求められていることを専攻科の特性と考え、次の 3 点を特に大切にしている

①自分で・自分たちで

“七転び八起きの自分づくり(図 3)

②見守り支援

③人との関わり

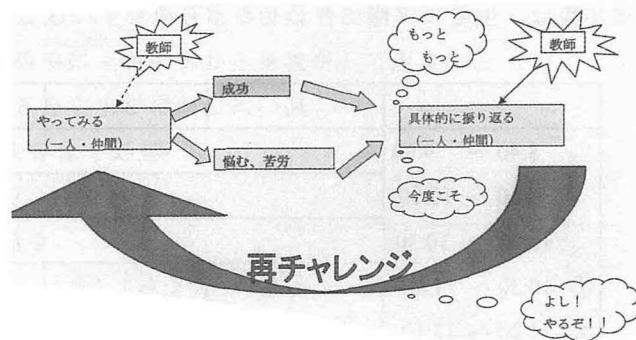


図 3 七転び八起きの自分づくり

“見守り支援”というのは、教師ができるだけ、手出し・口出しを控え、生徒に委ねるとのことである。失敗をしても、振り返り学ぶことでより自立的な自己肯定感が生まれる。そのためには、じっくりと振り返り、再チャレンジする時間の保障をすることが必要である。また、“自分づくり”に人との関わりは欠かせない。憧れたり、いろいろな価値観に出逢ったり、葛藤したりすることを通して自己を見つめ直し、新しい自分の考え方や価値観を形成していく。そのためにも仲間や同世代の友だちとの交流、校外の人々との出会いを多く設定していくことの重要性を考えた。

4.5 領域の実践例

「専攻科ではこんなことにチャレンジしたい」と、専攻科第 1 期生が教師とともに模索しながら各領域の学習内容を立案しスタートした。そして反省・評価を繰り返しながら、また生徒の実態に合わせて少しずつ各領域の学習内容を見直し、3 年目を迎えている。「これは是非

表2 2008年度 専攻科 5 領域題材配当表

行事	年次	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
共通	入学式9日 歓迎会25日	学級遠足5/2 クリンクリン ふれあいピック 宿泊学習 5/17	学級遠足5/2 クリンクリン ふれあいピック 宿泊学習 5/17	技能・作業大会 7/3 職場見学 7/11 同窓会サ マークラブ7/26	技能・作業大会 7/3 職場見学 7/11 同窓会サ マークラブ7/26	現場実習 9/3~9/17	ふれあいまつり 10/18	クリンクリン コンテスト 11/5~11/7	同窓会1/18 研修旅行	同窓会1/18 研修旅行	研究会2/27 卒業式3/13	研究会2/27 卒業式3/13	研究会2/27 卒業式3/13	
	1年	鳥取大学式見 学4/8 自転車検定	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	校内実習 グループホーム 体験(7,8,10)	交流校外学 習
	2年													
くらし	1年	自己紹介、 学級遠足計画、 新学期の買い 物、銀行・交 通・自転車 (5.3,4,17,22,25)	ふれあいピック、 施設体験回り 研修旅行(山口) (12,22) 久松山登山	グループホーム 体験①(見学・ 二泊三日通学) (17,20,22) トレーニング ジム・公共プール 利用	同窓会・ふれあい サマークラブ (20,22)	ふれあいまつり (12,18)	ふれあいまつり (12,18)	合宿 湖山池一周ウ ォーキング (1)	合宿 湖山池一周ウ ォーキング (1)	X単元 映画づくり (12,18)	交流学 習 (6,11) 同窓会 (12)	おしやれ 講座 (3)	校外学習 (17,22)	
	2年	新入生歓迎会 銀行、学級遠足 計画 (17,22)	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	トレーニング ジム・公共プール 利用	卒業旅行 (17,22)
食														
健康														
労働	1年	計画・挨拶 農産物、花の栽 培 (18)	職場等見学(2) クリンクリン活動 校内実習(生産) (12,18)	校内実習・学外 販売、職場体験 技能作業大会に 向けて(喫茶ビ ス等)(12,18,20) 現場実習に向け て・挨拶・実習 (12,18,20)	技能・作業大会 参加 (18,20) 技能・作業大会 応援(17,20)	ふれあいまつり の模擬店 (12,18)	ふれあいまつり の模擬店 (12,18)	仕事を知らう (18)	仕事を知らう (18)	仕事を知らう (18)	現場実習1年 (18) 生産販売・福祉展へ向けて (12,18,20)	現場実習1年 (18) 生産販売・福祉展へ向けて (12,18,20)	校内美化活動 (クリンクリン クラス等) (18)	
	2年													
余暇														
教養														
研究ゼミ														

毎火曜日。1週目に調理の計画を立て、次の2、3週目は調理実習。(2,6,9)
*一人で自分の調理をする。ただし、協同しての弁当作りもある。毎火曜日は、給食をカットしており、出勤や外食もある。
ウォーキング(毎日、3~4時間程度歩く。コースは日頃の生徒が決める。道案内も担当する。)(1)

注()内の数字は、モジュール番号(中央法規・社会生活プログラム・マニュアルより)

GT: ガストティチャー

続けたい」と1年目から受け継がれているいくつかの専攻科行事もあり、専攻科の伝統がつけられようとしている。ここでは、5領域のそれぞれの学習のねらいと主な実践例を挙げながら、成果と課題を検討する。

(1) 暮らし

ねらいは、「家庭生活に必要な知識や技能を身につけるとともに、積極的に社会参加する意欲や態度を身につける」である。

暮らしの学習には3種類ある。日常生活全般のスキルアップや定着を目的とした「暮らし」の学習、自分一人で調理する力をつけるための「暮らし(食)」の学習、体力向上や肥満予防の対策としての「暮らし(健)」の学習である。



(ア)「暮らし」の学習の内容は生活全般で多岐にわたるが、主なものとしてグループホーム体験、金銭管理、行事の立案や計画などである。(写真1)なかでも行事に関する学習が大半を占めている。校内宿泊、鳥大合宿、ふれあいまつり、研修旅行などの行事の前には、事前に自分たちで考えたり意見を出したりして取り組んでいる。活動後には、作文を書いたり話し合いを行ったりして、必ず個人で、または全員で振り返りをし、次回に生かすようにしている。

こんな頼もしい出来事があった。校外学習で「やまびこ館」に行く計画を立てていた時のことである。生徒A君が「当日雨が降ったら、お弁当どこで食べる？」という問いかけに対して、別の生徒B君が「それじゃ今度の日曜日に僕が下見をしに行ってみるよ。」と自主的に答えた。休日にB君は実際に下見に行き、部屋を予約してくれてくれた。当日は風の強い日であったが、そのおかげでみんなが暖かい部屋で弁当を食べることができた。……ありがとうB君。感謝・感謝。これは、みんなのために自分で考えて主体的な行動がとれ、友だちから大変感謝され自信をつけたB君の事例である。

(イ) 暮らし(健)

暮らし(健)では、天気の良い日は、60分間のウォーキングを行っている。その日のコースはウォーキングの先頭の生徒に任せている。学校から伏野海岸に行ったり、湖山池沿いを歩いたり、鳥取大学を往復したりする。最初の頃は、先頭の生徒がマイペースで歩いていたが、だんだんと自分のペースに後ろの生徒がついてきているのかを気にしたり、後ろが離れていると止まって待っていてくれたりという配慮ができ、先頭として友だちを気遣いながら、みんなをリードすることが上手になった。

冬季や雨の日は、教室でバランスボールを使って体操したり、ストレッチをしたり、ビリーズ・ブート・キャンプの体操をしたりしている。これはふれあいピック(運動会)の専攻科の演技につながった。

ウォーキングの効果を一番あらわしているのは、体重の変化である。なかでも10kgの減量につながった生徒もいる。しかし、長期の休み明けには、また元に戻る……。いかにウォーキングの継続が重要かが分かる。毎朝のウォーキン



写真2 湖山池一周ウォーキング

グの積み重ねの成果の学習として、山登りに挑戦したり、一周 16km の湖山池を歩ききったりする体験をした。達成感・充実感を味わうことのできるひとときだった。(写真 2) このウォーキングを休日の余暇にも発展させ、浦富マラソン大会やふくべ・らっきょう花マラソン大会のウォーキング部門に参加した。まさに、朝一番のウォーキングは、卒業後の余暇活動にもつながる貴重な学習である。

(ウ)くらし(食)

毎週火曜日のくらし(食)では、1週目は計画の日、2・3週目は調理の日として、3週間を1サイクルとして行っている。

1週目の計画の日には、前半を「ワンポイントレッスン」として、野菜の切り方や計量カップ・計量スプーンの使い方等、調理にかかわる基礎的なことについて学習をする。そして後半の計画では、テーマの「基本」をもとに「簡単」かつ「栄養バランス」を考えてメニューを選んでいる。テキスト本の漢字に苦勞する生徒も多いが、それぞれが辞書等で調べる時間を確保し、作り方をしっかり読むことでイメージできるようにしている。



写真 3「自分で自分の分を作る」

また調理では、危険でない限りできるだけ見守り支援をしているので、初めての調理の時には、こげたり時間がかかったりするなど改善点が多い。しかし、なぜそうなったのか、そして次にはどうしたらいいのかなど、自分で気づいたり友だちに指摘されてわかったりすることも多い。2度続けて同じメニューを調理することで、振り返りや反省したことを生かし、リベンジできるといういい機会になっている(写真3)。ジャガイモの皮むきに苦勞していた生徒が、2度目の調理の買い物ではむきやすいようにとメイクイーンを選んだり、事前に家で練習したり、学校で作った料理を家族に作ってあげたりする生徒がいるなど、学校での調理が家庭での生活に確実に繋がっていることをうれしく思う。

(2)労働



写真 4「喫茶店での現場実習」

「働くことの意義が分かり、主体的に働こうとする意欲や態度を身につける」ことをねらいに取り組み、現場実習(写真4)や、校内での労働体験、進路についての学習などを行っている。現場実習は年2回実施し、期間は2週間を目安としている。実習先は、本人と保護者との相談で決定している。また校内では、体を使っての「作業」の他に金銭を流通させることで「働く」ことに取り組む学習を行った。これは学級をチームに分け、「自分たちで会社(店)を運営する」というものである。本校では、生徒が模擬店を出してにぎわう学校行事の「ふれあいまつり」があり、これまでも仕入れや販売で金銭の流れを学ぶ経験がある。ここでは、実施する時期を自分たちで決めることで、じっくり、しっかりと計画的に進められるように配慮した。「社長」「社員(店員)」など自分たちで分担をし、本校職員を客に見立てて模擬会社経営を行った。「資本をもとに何ができるか」、「お客のニーズは？」など話し合い、「おやつの時間をねらって」の

戦略を立てることとなった。学習時間だけでは時間が足りず、休憩時間に準備をし、放課後残って販売をすることとなった。その姿は学校行事のふれあいまつりの模擬店以上の意気込みであった。自分たちが全てを企画したという責任がそうさせたのではないだろうか。

(3) 余暇

余暇の学習は「余暇活動の幅を広げたり、ボランティア活動の大切さを知ったりする」ことをねらいとして取り組んでいる。

図書館やプール、またトレーニングジムなどの公共の施設を利用する学習を体験として繰り返すことは、卒業後の休日の過ごし方の参考になっていくであろう。

フラワーアレンジメントの学習では自分の花器に自分流に花を生け、題を付ける。さらに、自分が飾りたい場所を決め、置いて学校の友達や教師に評価をしてもらう。これが一連の学習となっている。また教室の外に自分たちでデザインしたハート型の花壇を造り、種を蒔き、咲いた花を利用することもある。家庭訪問に行った際、家にフラワーアレンジメントを飾り、迎えてくれた生徒がいて、学校の学習との連携を感じた。

漢字検定は、「資格を取る」という目的の余暇の一つであり、毎年受験をしている。それぞれの生徒の目標とする級をテキストブックを利用して黙々と練習する姿が凛々しい。



写真 5「ボランティア活動」

休日は、卒業後の余暇生活につなげることをねらいとして、ボランティア活動に参加する経験を増やしている。「因幡の手づくりまつり」では、鳥取大学の学生さんと一緒におもちの作り方を教えるボランティア（写真 5）をしたり、車イスマラソンでは給水係をしたりした。やりがいのある経験をすることができた。これからも、生徒が卒業後に一人で挑戦できそうなボランティア活動を紹介していきたいと考えている。

(4) 教養

教養では、「基礎学力や日々の暮らしに役立つ知識を身につける」をねらいに、将来の豊かな生活に向けて役に立ちそうな様々な内容を 2 単位時間（100 分）× 2 回ずつ程度で設定している。

主な内容は、詩や和歌・俳句等、生活費と金銭管理、大人になるということ（選挙や年金）、大人のたしなみ（新聞を読もう）、健康な食生活の知識、権利や法律、福祉サービスの利用、世界の歴史や文化、外国語、恋愛・結婚・性教育、同世代の仲間との交流などである。

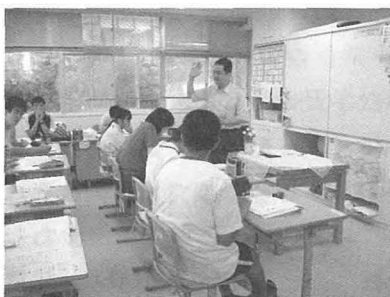


写真 6「ゲストティーチャーによる学習」

授業の担当は担任外で、専門的な内容はゲストティーチャーを招くなど様々な形態ですすめている。ゲストティーチャーとしては、学校栄養士、大学教授（鳥取大学、鳥取短気大学）、小学校教諭、元高校教諭、福祉関係者、本校養護教諭等である。生徒たちが興味を持って取り組めるよう、担当者は事前の打ち合わせを綿密に行うようにし、ねらいにそったワークシートを用意するようにしている。（写真 6）

どの学習も 100 分間を感じさせないくらい、集中して取り組み、自分の考えを発表している。知識を求めていることや学

習する楽しさを味わっていることを感じる。ちなみに、夏の同窓会で、いろいろな講座がある中で、「俳句」のグループを専攻科生が全員希望していたのには驚いた。春に俳句の学習をして、「おもしろい」「自分にもできる」と感じていたのだろう。

交流も大切にしている。特に、18歳～20歳の同世代の仲間との交流は、「そういう考えもあるのか」と、いろいろな価値観に出会え、青年期の自分づくりに役立つ。単に活動を共にして仲良くなるだけではなく、自分の思いを出して話し合うような場面を設定するようにしている。

(5) 研究ゼミ

ねらいは、「研究を通して興味関心ある物事への知識の深まりを図るとともに、コミュニケーションと情報活用力を高める」である。一人が一つのテーマについて、1年間かけてまとめ、最後には保護者も招いて発表会を行う。情報収集では、インターネットや本で調べる(写真7)。ほかにも、自作のアンケートで仲間の意見を聞いたり、いろいろなバスを調べるために休日に自分でバスを調べて乗ったりするなどの体験活動も取り入れ、主体的な姿が見られた。発表会では、情報機器を使ったプレゼンテーションだけでなく、自作のドレスを着たり、ミニチュアの列車を持ってきて走らせたりする生徒もいた。どの発表も仲間や保護者から賞賛の声が上がり、やり遂げた喜びと同時に自信に繋がる機会でもあった。発表することを目的として学習がスタートしたのではあったが、調べているうちに、「もっと知りたい。」「こんなことがしたい。」と一つのことを深め、没頭できる時間でもあった。昨年、バスの時刻表とバス停を黙々とパソコンに打ち込んでいた生徒に、「字がたくさんで大変じゃない？」と尋ねた。「いいえ。バスに乗ってる気がして楽しい。」という答えだった。結果ではなく、過程を楽しんでいる姿であった。この学習がきっかけになり、将来休みの日に何かに没頭し、充実した余暇を過ごすことができればと思う。



写真7「プレゼンテーションの準備」

5 専攻科の研究

本校では、平成18年度より「自分づくりを基盤とした教育の創造」を全体のテーマに掲げ研究を行っている。研究方法は、全体テーマをもとに、より具体的な学部テーマを設定し、実践を通して研究を深めている。

専攻科では、学部研究テーマを考えるにあたり、「青年期の自分づくり」を大切にしたい内容を考えていくことにした。しかし、どのように学校生活が展開されていくのか具体的なイメージがなく、生徒と共に生活を一つ一つ作っていくなかで、テーマを絞り込むことにした。学習が進むにつれて課題となってきたのは、学習内容と支援についてであった。それは、自分づくりの段階と青年期の特徴を考慮しつつ、どのように活動を設定し、どのような支援をしていけばめざす生徒像に近づくことができるかということである。

そこで、チャレンジを続ける生徒の姿を願い、専攻科テーマを「七転び八起きの自分づくり」とし、研究に取り組むこととした。

1) 18年度の取り組み

日々の学習を計画するにあたり、基本となる活動内容と支援について研究し、実践を行った。その結果、学習の結果だけではなく、そこにたどり着くまでの迷いや葛藤をする時間を大切にし、さらに、“振り返り、再チャレンジ”をする機会と時間を保障することで、より自立的な自己肯定感が高まっていく。そのような活動を準備していく必要があることを確かめることができた。

(1) 学習活動について

- ① 始めから終わりまで生徒自ら（仲間とともに）考える。
- ② 自己選択や自己決定をする場がある。
- ③ 体験や人との関わりを広げるための社会資源が活用できる。
- ④ 自分の行動を具体的に振り返ることができる。（自己評価・自己責任）
- ⑤ 再チャレンジできる。

(2) 支援について

- ①（活動前） 生徒の実態に合った適切な壁（目標）を設定する。
- ②（活動前半） 複数の選択肢を用意し、自己選択や自己決定できる場を作る。
- ③（活動中盤） 適切な位置をとり、じっくり待ち、見守りを基本とした支援をする。
- ④（活動後半） 視覚的な支援も含めた、より具体的に振り返ることのできるようなものを提示する。
- ⑤（活動後） 次の目標につながるさらなる課題を設定する。

(3) まとめ

成果として、指示待ちではなく、生徒が自分で考えて教師や友だちに話しかけるようになったこと、経験の枠に留まることなく意欲的に選択して活動の幅を広げることで利用できる社会資源が増えてきたこと、そして、核心に触れる振り返りができるようになってきたことなどが挙げられる。

課題として、少し高い課題の設定方法、生徒の自立度を高めることに効果のある見守り支援について、記録の取り方や評価の仕方、5領域の教育課程の吟味、学習形態の吟味を次年度へ引き継ぐこととした。

2) 19年度の取り組み

18年度の取り組みの一つである「始めから終わりまで生徒自ら（仲間とともに）考える」をさらに深め、「話し合い活動」を中心に研究に取り組んだ。

理由として、生徒が3名から8名になり、いろいろな意見や考えが出されるようになったがまとまらずに困ることがあったり、自分のペースでの活動にはじっくりと取り組んでいるが、仲間を意識した行動やコミュニケーション面ではそれぞれが課題を持っていたりしたからである。そして、この「青年期に、仲間の中で」という環境で「話し合い活動」を行うことは、より自立を意識した「自分づくり」を支えるために有効な活動ではないかと考えたからである。

自己肯定感を支えるための授業づくりとしては、「くらし」と「労働」で取り組んだ。「くらし」と「労働」は、「話し合い活動を中心に進めることができる、集団で行うことが多い、実際に行動する」活動であり、他者との関わりが広がる機会であると捉えているからである。また、現在の生活や将来の生活をより豊かに送っていくための知識や技能を身につけることので

きる学習でもある。

(1) 研究内容について

昨年度の課題を更に深めるために以下のような研究内容を設定した。

- ①話し合いの中で理由づけした自分の意見を持ち、相手の意見も受け止め、さらに考えをすり合わせていく過程や変化を捉え、心を揺さぶることができるような話し合いになるように、適切な目標設定や内容を探る。
- ②生徒自身が学習を振り返る「振り返り表」を活用し、客観的に自分を捉える視点を育て、さらに課題を仲間や教師と共有することで次への意欲へつながるような内容を考える。
- ③“原案作成→提案→話し合い→実践→振り返り”の学習形態を通して、自己選択をするために筋道を立てて考える力の育成と、自己決定できる教材を考える。
- ④記録・評価の観点を整理し、積み上げができるものを考える。
- ⑤見守り支援についてまとめる。

(2) 取り組みの様子

生徒たちは、自分づくりの実態(注2)では、「自制心芽生えの時期(3歳半)」から「価値的自立の始まり(14歳)」の中にいる。この中でも特に節目として考えられるのは、「できないの理解と葛藤(4歳半の節)」や社会的自我の芽生えとして、みんなの中の自分・自他の表面的な理解が始まり、「もっと～したほうがよい。だからがんばろう」という5歳半の段階、そして「他者の視線に気づき自分の現実を受け入れていかなければならない葛藤の時期(9歳)」であり、まさにそれぞれの生徒がその段階で揺れ動いていた。

そこで、これまで生活の中から挙がってきたこと、学習の中で決定していくことについて議題を設定し話し合いを行ってきた。議題としては、「登山に行こう」「研修旅行」「宿泊学習」「ふれあいまつり」「学級の役割を決めよう」など多岐にわたっている。

「話し合い」にあたって、まず押さえておきたい態度面のスキルに着目した。「姿勢を良くする」「返事をする」「聞く人の方をみる」「最後まで聞く」など、どれも生活の中で大切にしたいことがらであった。

次に、話し合いの流れとしては、議題に対して自由に意見を発言するようにしていたが、少し内容が複雑な場合は整理したり、発言に自信の持てない生徒も発言しやすくするために「話し合いメモ」を用意し、一度「書く」という作業を行ったりしてから話し合いを行うようにした。基本的な話し合いの流れは、話題について自分の意見を持つ→理由をつけて、意見を出し合う→分類する→つなぎ合わせまとめる(意見を集約する)とした。

特に「相手の発言を受け止める」ということは、「相手を認める」ということがベースになっているように感じた。この行動は自分づくりの段階ともマッチし、生徒にとって乗り越えることの難しい課題でもあった。

「ふれあいまつり」をテーマにした学習を行った。議題として、「自分たちができる店を考えよう」という投げかけをした。これは「したい」だけではなく、「当日までの時間や自分たちの経験をもとにし、客観的な視点も取り入れながら自分たちだけでやり遂げられること」を考えてほしいという願いからであった。最初の話し合いの中では、「子どもが食べるからカレーは甘口がいい。」「ビデオはポケモンやアンパンマンにしよう。」など、他者(お客さん)の

視点に立っての発言が出始めていた。しかし役割などについては、教師の「自分たちだけでできるの？」という心配をよそに「大丈夫です。」という返事であった。結果4つの店を開くことになった。しかし、二人グループでは仕事が大変で、休憩がとれないことに気づいている生徒は一人だけであった。そこで、練習で模擬店を行い、実体験することで問題点に気づき、話し合いを行い、運営方法について考えていくことにした。

模擬店の練習では、「大丈夫」の返事とは裏腹に、どこもてんでこ舞いであった。体験もさめないうちの話し合いでは、「二人では無理。」「休憩したい。どうすれば、休憩ができるか。」「ボランティアを頼む。」「バイトをやとう。」「合体する。」「ローテーションをする。」と表を見ながらみなで思案した。そして、2日にわたる話し合いの中で、少しずつ全員が納得できる考えに近づいていったのである。

(3) まとめ

生活の中から出てきたこと、共有できること、自分の利益に関わることに限らず、自分の意見を持ちやすく活発な話し合いとなった。体験があつてこそ、振り返ることができるということも実感できた。そして、再チャレンジをすることで「よかった」「できた」だけでなく「まだまだ」「大変だった」という感想もでてきた。「七転び八起き」の「転ぶ」という体験は、決してネガティブな失敗ではなく、「迷い」「悩み」と捉えることで、自分づくりを支えていけるものとなる。そして自分づくりには、仲間を含めた人間関係づくりが大切であり、いつも同じではなく変化していく人間関係が豊かな心情を育てていくものであることが分かった。そのためにも生徒一人一人の日々の変化をきちんと捉えるようにしていきたい。

3) 20年度の研究について

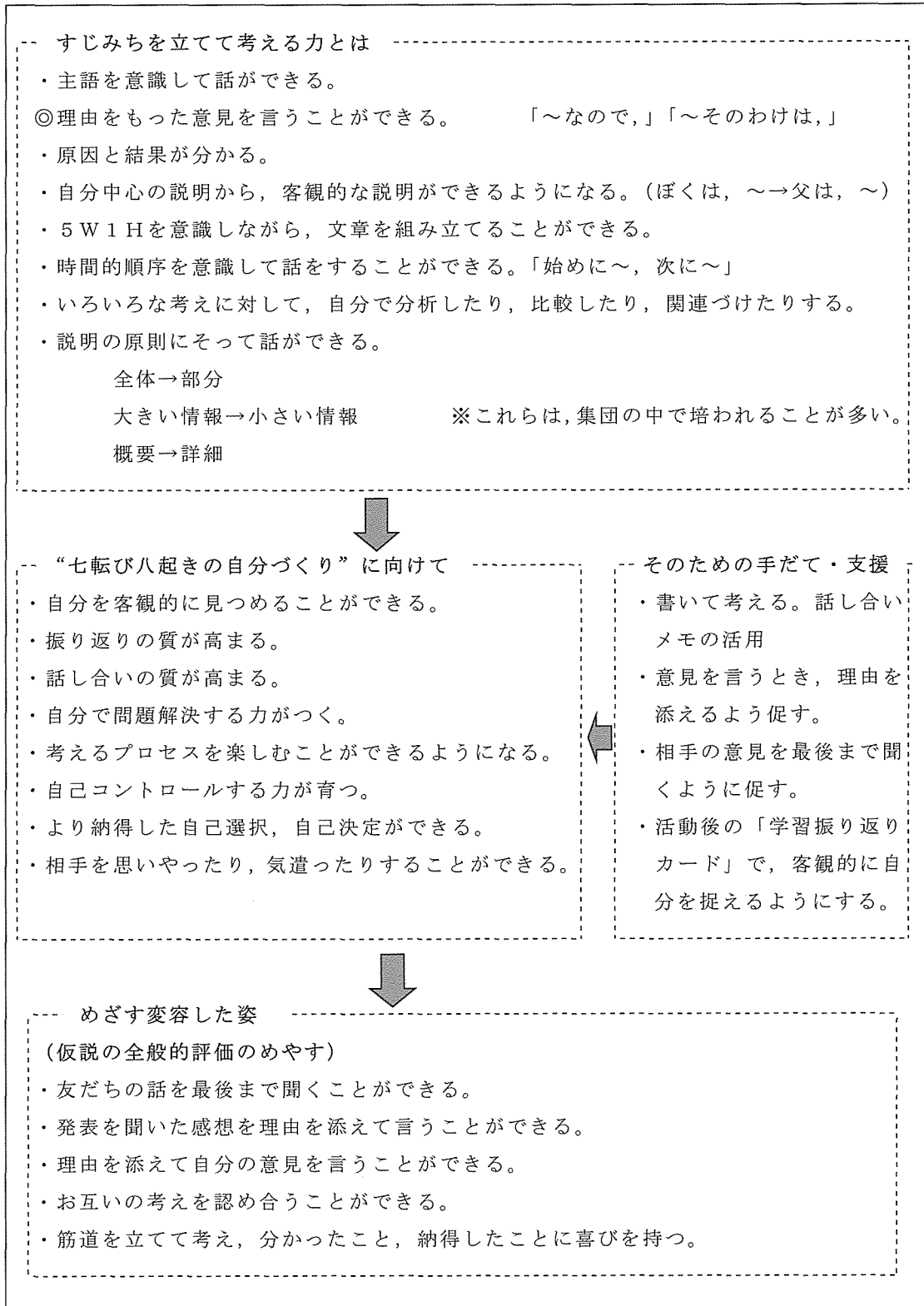
新しい仲間を迎えた専攻科では、昨年度に引き続き、さまざまな学習で話し合い活動に取り組んでいる。いつも「話し合い」を行っているので、生徒たちは、何かあると「話し合いをしよう。」と自分たちで解決しようと行動することが多くなってきている。しかし、自分の意見を主張することはできるが、その主張が思いつきや雰囲気によるもので、なかなか意見が積み上がりにくかったり、まとまりにくかったりしていることがあった。せっかくの葛藤をうまく昇華できないでいた。また、司会者も話題を深めたりまとめていったりする方法に困り、結論のでないことがあった。これらは、「自分自身を納得させる理由」を考えたり表現したりすることの未熟さからくるものであるように感じた。

そこで、昨年度も取り組んだ「話し合い活動」を継続して行いながら、より自分の意見（考え）をじっくりと深めるための「すじみちを立てて考える」ことを研究テーマとした。「すじみちを立てて考える力を育む」ことで、自分の考えに自信が持て、より豊かに表現することにつながり、また、相手のことも受け止めることができるようになり、客観的に「自分」を見つめることができるようになるのではないかと考えた。

このような内容を研究するにあたり、全体で広く話し合うというような学習は「くらし」「労働」「余暇」を中心に、個人でじっくり考えたり活動したりする学習は「研ゼミ」「教養」「くらし（食）」の中で取り組むことにした。その中でも、「すじみちを立てて考える」を大切に、自分の興味あることをじっくりと調べたり、まとめたりしてみんなに伝える活動を行う「研ゼミ」を軸にして、研究を進めていくことにした。

(1) 取り組みの様子

まず、「すじみちを立てて考える」ことと「自分づくり」、「めざす姿」についての共通理解を行った。(資料2)



資料2 すじみちを立てて考える力と手だて・評価の視点

次に、「すじみちを立てて」に関わる観点を絞り、実態把握を行った。

① WAIS-III（成人知能検査）の中から関連項目を分析し、つまづいているところを探る。

②不足している内容は新版K式などの検査項目を参考に、取り出して検査を行う。

現在、分析を通しておぼろげながら見えていた生徒の姿がはっきりとし、目標や支援について具体的に挙げることができつつある。

また、全体研究で行っている「段階別教育内容表の改訂」に関わり、「社会生活プログラムマニュアル」との関連も図りながら、教育課程をまとめている。

研究ゼミのテーマの決定は、意欲や興味を大切に自分であるいは家族と相談して決めている。テーマ決定の後には、内容、調べ方、スケジュールなどの計画を立てていった。調べ方の中には、必ず「校外で行うこと」や「体験すること」など自分から社会へ関わっていくことを入れるようにした。まとめ方も自分で工夫するが、基本的にはプレゼンテーションソフトを利用してまとめるようにした。これは、全員がパソコンが好きであるということと、スライドシートを順番に作ることで「これができたら次はこれ」と考える流れが分かりやすくなると考えたからである。また、シートは視覚的な情報であり、「考える」場合に言葉だけよりも生徒にとって支援となると考えたからである。

生徒たちは自分の興味あることについて黙々と調べてきた。活動は、およそ調べる2割、パソコンでまとめる8割のバランスである。特に「調べようと思ったわけ」と「自分の主張」については「なぜ」と問いかけを繰り返し、自分が調べている内容を確認するようになってきた。

7月に学級で全員のプレゼンを見合った。お互いに「良い点」と「アドバイス」を話し合った。その中で「アドバイス」を受け止めることができるか心配したが、文字の間違いや説明不足な点、また文字の色など、自分が工夫したものではあるが、相手の立場に立って見た場合に分かりにくかったり、読みにくかったりすることを素直に受け止めていた。さらには一人でこつこつと直す姿が印象的であった。「すじみちを立てて考える」ということでは、現在集めている「証拠」をどのようにつなげたりまとめたりするかを、それぞれの実態にあった支援を工夫し、達成感のあるまとめとしていく予定となっている。

6. 専攻科生の育ち

今年の3月、専攻科第一期生が卒業した。それを期に専攻科教育を振り返ろうと保護者（1,2年）にアンケートをとった。設問は、①専攻科教育で本人の成長や変容を感じられたところはどんなところですか。②高等部本科の発展として、専攻科の良さはどのような点にあるとお考えですか。③ご家庭で介助や支援を減らして見守り、本人に大人として接したり、任せたり、自己選択したりする場面はどのように工夫されましたか。であり、以下のような回答が寄せられた。

①については、「自分で考えて行動する場面が増え、積極的に外へ出かけるようになった。交通機関や施設などに自分で事前に電話で交渉したりもできるようになった。」「今まですべて人から指示されないと行動できなかったが、自分で考えて行動できるようになってきた。」「自分の考えを迷わず話せるようになった。」「自分のことしか考えられなかったが、友だちや仲間との関わり方が分かってきたように思う。」「家族の一員として、家の手伝いを自分からやろうとする姿が多く見られるようになった。また就寝時刻など明日の予定を考えて調整したり

もできるようになった。」などである。

②については、「自分たちで、計画→準備→実行という経験が多く、充実感や達成感を味わう機会が多い。」「自分たちで考えて行動すること」「年齢に相応しい、興味関心に基づいた学習が積み重ねられる。」「育ち合う仲間集団として、青春時代を満喫できる。」「働くことだけでなく、生き方が学べる。」「毎日の学習が、実生活や社会生活に基づいている。」などであった。

③については、「年金の受給手続きや銀行の利用の仕方など一緒に行くが、できるだけ本人にさせるようにした。」「自分で計画したことにはあまり反対せず、小旅行など行かせるようにした。」「私服登校になり、毎日着る服は自分で考えさせるようにした。」「周りの方々の理解を広げる場を持ちながら、一人で行ける行動範囲を広げていった。」「いろいろな場面で本人の意見を聞いて自分で考え、決めさせるようにした。」などである。

以下は、教師の目から見た成果である。①自信をもってさまざまな活動に取り組むことが多くなった。何かあると教師の顔を見ていた生徒たちが、まず自分で考えてみようとする姿に変わってきた。分からない言葉や漢字があると、以前はすぐに人に聞いていたが、自分ですぐに辞書を引いて調べるようになった。調べること自体を楽しむ様子も伺える。②大人としての自覚ができてきた。自分や友だちの20歳の誕生日を特別な思いで迎える。選挙権・基礎年金の手続きなども始まり、家族と離れた生活・グループホーム生活などを現実的に考え始める。特に2年生は、下級生に対する責任感から自己有能感を高めていく。毎日新聞を開くことにも抵抗がなくなり、食や事件などの社会ニュースを友だちと会話したりする姿がある。③多くの人との関わりを通して、人に自分から話しかけたり、大きな声で話したりできるようになった。友だち同士の関わりも増え、自分のことしか見えず意見を譲れなかったのが、人の意見に耳を傾けたり、自分を振り返ったりできるようになりつつある。④多くの社会資源の存在を知り、活用できるようになった。これはきっと卒業後の余暇の充実や困ったときの支援のネットワークにつながるだろう。⑤卒業後の進路において、自分が何をやりたいのかははっきり分かり、納得して進路を自分で決めることができた。これは何より嬉しいことであった。

3名の修了生の進路は、企業（鳥取大学学生協の食堂）と通所授産施設、そして洋裁の専門学校である。それぞれが、「もらった給料で休日には汽車の旅行をしたい。」「慣れてきたら、喫茶の部門にチャレンジしたい。」「自分でデザインした洋服を自分で縫いたい。」など、そこでどんなふうにしたいのかイメージし、夢をもって進路を決めた。そして現在、それぞれが自分の思いを実現させながら充実した生活を送っている。先日のふれあいまつりでは、事前に傘踊りの指導に来てくれたり、飛び入り参加して、専攻科生と一緒に「しゃんしゃん傘踊り」をステージで披露してくれた。また、「卒業生の店」（模擬店）もオープンし、大盛況であった。一方では、地域の行事、「浦富マラソン」にも参加し、1・2年生とも交流を深めた。とても頼もしい第一期生である。そうした先輩の姿を見て、後輩が受け継ぎ、伝統をつくっていくだろうという手応えを感じている。

専攻科の生徒たちは、多くの人や仲間と関わり合いながら、いろいろな活動を通して、葛藤し、新しい価値観に気づいたり、自分の良さを発見したりして自分を見つめ直し、自分づくりをしてきた。保護者アンケートからも、自己実現に向けてより豊かに心が育ってきていると確信している。これは、学校だけでなく、家庭の協力の力も大きい。

7. おわりに

国公立初の専攻科として、3年目を迎えた現在も県外からの視察が絶えず、全国で専攻科教育への関心は高い。1年目、試行錯誤しながら生徒たちと教育課程を作り上げてきた本校高等部専攻科であるが、今では恒例の専攻科行事もでき、専攻科の教育課程が確立できつつある。成長する生徒を見て、専攻科教育の意義の大きさを知ることができた。「青年期の自分づくり」をベースにしながら、「学校から社会へ」「子どもから大人へ」と移行支援に取り組んできたが、今後は、2カ年教育課程の再構築の必要を感じている。また効果的な学習形態を工夫したり、全国の専攻科を志向する人々との交流を大切にしたりしながらさらなる検証と発展に努めていきたい。そして、少しでも早く、県内外の国公立の特別支援学校に専攻科ができることを期待している。

《注》

- 1) 「自立を支援する社会生活プログラムマニュアル」知的障害・発達障害・高次脳機能障害等のある人のために 奥野英子他著 日本リハビリテーション連携科学学会・社会リハビリテーション研究会企画
- 2) 「自制心芽生えの時期」などについては、鳥取大学附属特別支援学校「自分づくりの段階表」、渡部昭男・寺川志奈子監修『「自分づくり」を支援する学校』明治図書、2005年、28～30頁を参照のこと

END